



わかすぎ

第
129
号
2011
平成23年2月発行



安乗人形芝居

志摩市立安乗中学校
人形文楽クラブ
「傾城阿波の鳴門 巡礼歌の段」



写真：志摩市教育委員会提供

INDEX

- 02 大人への道
安乗中学校生徒が継承する「安乗人形芝居」
- 04 わかすぎ時評15
「海洋生物科学」って？
- 05 地域活動支援事業〈経過報告〉
・子どもたちへの事後アンケート
- 06 青少年特別企画事業〈第3回報告〉
・カプラ造形コンテスト
・デジタルフォトコンテスト
・伝統芸能オンステージ

- 06 〈作品募集〉
・中学生のメッセージ2011
- 07 〈事業報告〉
・財団理事長表彰
・青少年育成指導者のための研修会
- 08 〈結果報告〉
・「家庭の日」絵画・ポスター展
・高校生世代活用事業
〈編集後記〉

〈編集発行〉

(財)三重こどもわかもの育成財団
〒515-0054 三重県松阪市立野町1291
(みえこどもの城)中部台運動公園内
TEL：0598-22-4911
FAX：0598-23-7792
E-mail：ikusei@mie-cc.or.jp
URL：http://www.mie-cc.or.jp

あ の り 国指定重要無形民俗文化財『安乗人形芝居』は、 志摩市立安乗中学校の生徒たちが継承しています

『安乗の人形芝居（安乗文楽）』^(※)は、430年位にわたって伝承され、祭礼の際の安乗神社に奉納します。神賑（かみにぎわい）として神に奉納する人形座で、神社で三番叟（さんばそう）を舞って船の海上安全を祈っていました。戦争などで4半世紀近く中断された時期もありましたが、大阪文楽座の吉田文五郎一座が安乗神社で奉納したのをきっかけに、安乗神社境内の舞台上で『安乗文楽』が上演されることになり、昭和25年初牛の祝いに披露して蘇りました。

現在は地域の皆さんの指導で中学生が中心に『安乗文楽』を神社へ奉納しています。卒業生の尾崎完治さんと安乗の人形芝居ファンの泊正徳さんからお話を伺いました。

（※昭和33年12月県無形文化財指定、昭和55年1月国指定重要無形民俗文化財指定）

■ 安乗の中学生が文楽で文化おこし

尾崎：“ゆとりの時間”が始まって、教育課程の必修のクラブ活動として文楽クラブがスタートする少し前、昭和53年位でしょうか、安乗中学校に文楽の後継者育成ということを目的に、文楽クラブはスタートしました。

Q 中学生になって初めて人形を扱ったり、語りとか三味線とかの役割を頂くのですか。

尾崎：その頃は、人形だけです。三味と語りはテープでした。（人形）遣いの方は結構なところまでできました。

Q 語りとか三味線は地域の大人の方ですか。

尾崎：はい、生徒の遣い手の方は充分できたと思う様に育ったので、地元で三味と語りを育てて頂きました。

Q 文楽の全てを、中学生で上演可能になった！

尾崎：はい。とにかくいいものに仕上げると、見てくれた人が必ず喜んで拍手喝采してくれるに違いない。それを受けて友達も喜び、自分たちがしていることに誇りを持ってより頑張ってくれるだろう。だから後継者を育てようと思うなら、いいものを仕上げていくということが一番大事じゃないかと。生徒も頑張ってる。最初の頃は新聞やテレビの取材が来ると言うと生徒は緊張しながらも喜んでね。

■ 地域文化は“きっかけ”と“レベル”が両輪

Q マスコミによって、親戚や地域の方たちの話題になりますね。

尾崎：子ども達もずいぶん誇りをもってます。そしたら、文楽クラブの希望者も増えて…いいものを仕上げるということはやっぱり大事だと思ったんです。もう27年間かな…、4月に稽古が始まって、9月には観てもらわないかんのですから。夏休みに入って集中的に練習です。私は「いいものを仕上げたら、必ず喜びがある。それが本物の喜びで、正しく強く頑張ろうという気持ちになるんだ」と。今でも自分は変わってないですね。

Q 先輩の舞台を観て理屈抜きの感動というか、一種の憧れみたいなものを後輩に伝えることができるまでには日々の努力があったでしょうね。大人や後輩から評価を貰うと、更に、辛くっても頑張ろうかっていう手ごたえを得るでしょうが、そこまで彼らを引っ張るのは、指導者の存在だと拝察します。中学生の頃は伸びる力がある時期ですからね。

尾崎：そう思います。しんどいから辞める人間ばかりじゃないと思うんです。それが人間として大切じゃないでしょうか。

泊：一番おおもとってというか、安乗の人形芝居っていうものを子どもたちに、教えて指導していくに当たっては、やっぱり継承っていうか、伝統文化の継承っていう大きい枠があってですね。

尾崎：はい、まずそれが果たせなきゃいかんみたいな。

泊：伝統を後々まで伝えていきたい、という先生の強い思いですね。

■ 子ども達が成長して、保存会で指導者に

尾崎：「目の中に入れても痛くない」と、子どものことを思う親の気持ちが表現されるけれど、まさにそんな気持ちだったです。子どもたちがかわいくて、かわいくて。何人かは、その後保存会の方に入っています。

泊：尾崎先生が望んどったようなことが今に引き継がれて、今があるのね。

尾崎：嫁いで、子育てしながら仕事も家のこともやらないかんでも、保存会でやってくれてる。なんとも言えぬ嬉しさと感謝の気持ちです。

Q 先生としては最高の、ご褒美というか、子どもたちからの。

泊：本当に。尾崎先生の伝統文化を残していかないかん、という思いで今の『安乗文楽』の姿がある。

■ 文楽は神祭（かみまつり）って言われていた

Q 秋祭りが神祭りって伺ったのですが…

尾崎：お寿司とかを重箱に入れてね、文楽見て、幕間にご馳走を食べて。子どもには文楽って、ちんぷんかんぷんでしたけれど。ご馳走が食べられて、お祭り気分が楽しかった。良いものっていうのは理屈抜きでね、感動というか、見ることで憧れみたいなものになってきたら、少々辛くっても頑張ろうかっていう気持ちですね。子どもというのは何か、素晴らしい才能を持っている。それをどれだけ引き伸ばしていくか、それを教師ができるんだと。教科の学習にしてもなんでもそうだと思うんですね。妥協してしまったら妥協された子どもはそんなもんで終わってしまうと思うんです。

■ 何故、安乗に文楽が…

Q 20年位前ですが、国立文楽劇場の知人にお会いしたら、「安乗文楽の指導に行っている」とのことでした。何故と考えて、安乗って言うのは歴史的な部分もあるのかなって、海が荒れたときに船に乗っていた人たちが、陸の“お楽しみ”のように、文楽を楽しんで貰うとか。

尾崎：関係ありますよね。文楽が栄えたのは、風待ち港としての存在が関係しているんです。停泊してくれる機会にいろんな文化が入ってきたわけです。

Q 安乗の文楽って言うのは、そうすると相当古くから…。

泊：そうですね。400年超えましたね。430年位。

尾崎：聞いた話では、鳥羽の九鬼水軍がちょうど安乗の沖を航海している時に風の加減で進めなくなって、そこで一旦安乗の港に下りて、その安乗神社で無事戦功を果たして帰れるように祈願したところ、風向きが変わって、無事に戦に参加できて帰れたと言うことで、安乗神社に再度寄ってお礼をしたらしいそうです。その時に村人の希望もかなえる、と言うことで。村人からの希望が「我々にも文楽をできるように」と。それがかなえられて安乗に文楽が始まった、ということです。

Q その文楽っていうのは、そもそも九鬼水軍が。

尾崎：はい、その、当時の文楽というものが今で言う三番叟です。安乗神社に今、お祭されているのは三番叟の三体の人形です。それが最初の人形じゃないかなと言われてるんです。大阪との交流があって指導に来てもらって三人使いの人形も始まったんじゃないかなと。

Q ということは、地域の人たちには、すごく身近なお楽しみ。昔は今みたいなテレビとかがないから、小さい頃から見慣れ、聞き慣れ。

尾崎：そうです。私ら小学校の頃の秋祭りは、今の文楽があって、神祭って言われていた。

最後に…今、私の部屋には大阪の国立文楽劇場から届いた4月公演の案内には久しぶりに、襲名披露口上の演目が載っています。安乗文楽のお披露目は毎年9月ということでしょうか。地域の人たちには楽しみな舞台であり、自慢の舞台と拝察します。
(文責：中西智子)



「海洋生物学」って？

伊勢湾に面した三重大学の生物資源学部には、「海洋生物学講座」があります。

「どのようなことを研究しているのかしら」と木村妙子准教授と研究室の院生の高木さん、谷口さん、川井田さんからお話を伺いました。

顕微鏡で見る「海の動物 プラクトン」《顕微鏡は160倍の拡大性能！》



■ 海の動物 プラクトン

Q この研究室ではお魚を増やすための研究をされているのですか？

木村先生：私たちの海洋生態学研究室では、魚類よりもカニや貝といった背骨のない動物の生態の研究をしています。世間一般にはあまり知られていない動物の研究では、それらの生物がどんな一生を送り、自然界の食物連鎖の中でどんな役割を果たしているかを自然の中に実際ににかけて調べています。大学の船に乗って調査することもあります。

高木：例えばプラクトンは普段の生活ではあまり目にすることはありませんが、魚などの大きな動物にとって重要なエサとなります。

Q プラクトンは赤潮の原因になる悪いものではないのですか？

高木：プラクトンと一口にいっても様々です。赤潮の原因になるのはある種の植物プランクトンで、その中には毒を作り出し、漁業や養殖など水産業に打撃を与えるものもあります。一方で、エサとなるプラクトンがいなくては魚やクジラなどが育つことができません。

木村先生：赤潮の原因の一つは工業排水や農業排水、生活排水に含まれる物質が多くなりすぎることで、それらの物質によってプラクトンが異常発生するのです。

Q 海の生態系を研究することによってどんなことに役立ちますか？

木村先生：日本沿岸には海の外来種が増えています。また干潟も少なくなっている今、海の生態系を守らなくてはなりません。そのためには生態系の構造を知る必要があるのです。

谷口：例えばシジミには日本古来のヤマトシジミ、マシジミ、セタシジミがいて、ヤマトシジミが好んで食べられているのですが、移入種として入ってきた台湾シジミは繁殖力が強く全国各地の用水路などで増えていて、もともと日本にいたヤマトシジミの居住が脅かされているかもしれないのです。

Q 水産技術職ってどんなお仕事をされるのでしょうか？

谷口：海洋環境変化や水産資源を調査して、その現状に適應するための技術を開発したり将来の環境変化を予測したりします。例えば、近年海水温度が上がってきて南方の魚もより北まで上ってくるようになったので、どこでどんな漁法で漁をしたらどんな魚が獲れるか漁師さんたちに教えたりします。また、ブランド水産物の安定供給も仕事の一環としてすることになっています。カキは普通、夏は毒があって食べることができませんが、夏場でも安心して食べられて、しかも身が大きいイワガキの生産技術の研究をしたりするんです。

Q みなさんが海の生物の研究をしようと思った動機やきっかけは何ですか？

川井田：僕の場合は小さいときに鹿児島島の浜辺で遊び、磯の生物に触れたことですね。

高木：私は、2歳の時に近くの鳥羽水族館で見た「お化けダコ」に触発されました。足が普通のタコよりたくさんあって木の根っこみたいに枝分かれます。それを見て「海の生き物って面白いな」と思いました。

谷口：みんな自分の興味や好奇心が研究への強いモチベーションになっているみたいです。

Q 将来的に、海の生態系はどうなっていくと考えられますか？

高木：日本近海で獲れる魚の種類や漁獲高が変わり、それに合わせて日本人の食生活も変わっていくかもしれません。もちろん、サンマやマグロなど私たちが昔から食べてきた魚がなくなってしまうのは寂しいと思いますので、増やす方法を考える必要があると思います。しかし養殖は海洋汚染を引き起こすなどの問題もあり、やはり自然の中で水産資源を守り維持していくのが良いように思われます。

最後に

木村先生の研究室の顕微鏡は160倍の拡大性能とのこと。それでも目を凝らさないと判らない位の生き物が研究対象です。レンズを通して研究する「カイアシ（橈脚）類」ないし「コペポダ（ギリシャ語）」と呼ばれるプランクトン（クラゲ・ミジンコ等）のお話を伺っていると、秋刀魚が高値だったのも海の生態系と関係していることが判りました。（文責：中西智子）

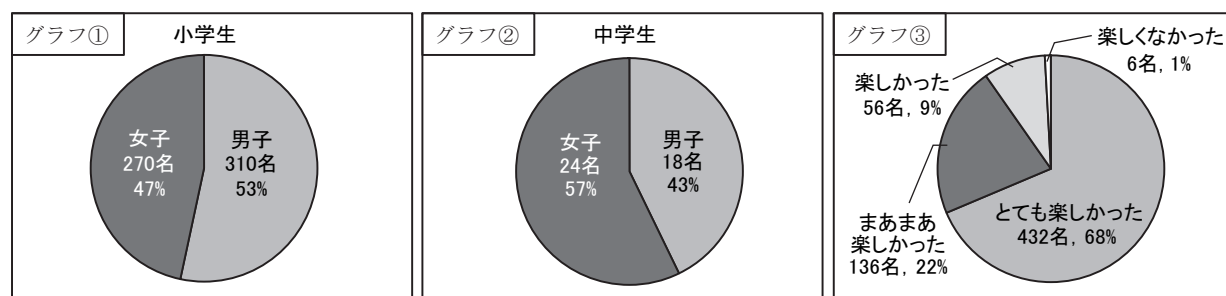
平成22年度「地域活動支援事業」実施団体による 「子どもたちへの事後アンケート」《経過報告》

地域活動支援事業は、三重県内の青少年育成市町民会議を中心にして、地域づくりなど社会への波及効果をもたらすような地域に根ざした事業や運動を実施している団体に対して助成しています。

本年度は、13団体が実施し、全参加者数は大人と子どもを合わせて約5,000人に上ると考えられます。参加した子どもたちの内622名（※記入漏れ、複数回答も若干数有）から事業に関するアンケートが寄せられましたので、内訳と感想などの経過報告を掲載いたします。

■ アンケート回答者（内訳）（グラフ①②）

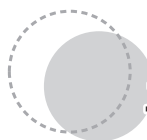
■ 「今日は楽しかったですか？」への回答（グラフ③）※複数回答あり



回収したアンケートでは、622名の内「とても楽しかった」と答えた子どもが432名（68%）もあり、「まあまあ楽しかった」（136名／22%）、「楽しかった」（56名／9%）を合わせると624名（99%）にもなり、何らかの形で楽しい思い出になったと感想を寄せている子どもは99%にもなり、本事業の評価が極めて高いことが分かります。（グラフ③参照）※複数回答があるため合計が回収数を超えています。

また、子どもたちの声には「友達と遊べて楽しかった」「いろんな探検が出来て楽しかった」「ほかの学校の子もたちと友だちになれた」などの声が多くありました。

いつもの生活を離れて一人で参加するキャンプなどでは自立心養われ、また家族で参加する自然とふれあう行事への参加では、家族の対話を深めることに繋がったと思われます。当財団では、今後もこのような子どもたちの声を参考にしながら、子どもたちの最善の利益を尊重する地域活動を支援していきたいと考えています。



平成22年度 青少年特別企画事業〈第3回報告〉

※この3事業は、平成23年度も継続して実施いたします。

みえ青少年カプラ造形コンテスト

白木の板カプラで、課題「夢の塔」の造形作品を募集したところ、中・高校生から41チーム(参加者199名)の応募がありました。

場 所 みえこどもの城 プレイルーム
(カプラの部屋)

表彰式 平成22年9月26日(日)

最優秀賞「ドームの塔」



チーム KeiGo 代表 仲田啓悟さん
(松阪市在住・中学生)

みえ青少年デジタルフォトコンテスト

「友だち・なかま・家族」をテーマにした人物写真を募集し、県内の中・高校生、大学生から62点の作品が集まりました。最優秀賞者は、仲の良い友達との楽しいひと時を撮影したものが選ばれました。応募してもらった全作品をみえこどもの城のミニ美術館等にて展示しました。

表彰式 平成22年10月16日(土)

デジタルカメラ部門 最優秀賞 携帯カメラ部門 最優秀賞
「いざ、出陣!!」 「あなたがいるからわたしも笑う」



大竹亮宣さん
(津市在住・大学生)



戸田奈美子さん
(四日市市在住・高校生)

みえ青少年伝統芸能オンステージ

県内で地域の文化の伝承に取り組んでいる人達を応援したいという主旨で行っている企画です。

場 所 松阪コミュニティ文化センター

開催日 平成22年11月7日(日)

出演者 県内の7団体、小中学・高校生による技の披露
伊勢の国 飛龍東員太鼓(東員町)
津しゃご馬保存会(津市) ※右写真
磯部楽打天晴倶楽部(志摩市)
伊勢宮後子供木遣保存会(伊勢市)
和太鼓グループ響座・いなせ組(松阪市)
江州音頭・祭文音頭 伊賀青山会(伊賀市)



平成23年度は、11月6日(日)に同会場にて開催いたします。

中学生のメッセージ2011(第33回少年の主張三重県大会) 作品募集

「中学生のメッセージ(少年の主張三重県大会)」は、中学生が日ごろ感じていることや考えていることを広く県民に訴えることにより、青少年が自分の生き方や社会との関わりを考え、また、青少年に対する県民の理解・関心を深めることを目的として実施します。昨年は県内61校から8,914人の応募があり、その中から14人の方々に大会で主張を発表していただきました。本年もたくさんの応募をいただきますようお願い致します。

- ◆**応募資格** 県内の国公私立中学校(特別支援学校中学部を含む)の生徒及び、それに相応する学籍又は年齢にある方。
- ◆**日 時** 平成23年8月28日(日) 13:00~16:10(予定)
- ◆**会 場** アドバンスコープADSホール(名張市青少年センター) 名張市松崎町1325-1
- ◆**提出期限** 平成23年6月10日(金)

※応募方法など詳細については当財団ホームページ(<http://www.mie-cc.or.jp/ikuseihp/>)を参照してください。作品応募者全員に参加賞を贈呈します。また、当事業に対して協賛していただける企業・団体を募集しています。

平成22年度財団法人三重こどもわかもの育成財団理事長表彰

本年度は、永年、児童・青少年の健全育成にご尽力いただいている個人3名と3団体が表彰されました。

場 所：三重県総合文化センター

表彰日：平成22年11月16日（火）

■個人の部〈敬称略〉

大橋 主郎（桑名市） 伊藤 勝也（尾鷲市） 居軒 正博（紀宝町）

■団体の部〈敬称略〉

沼木中学校区青少年健全育成協議会（伊勢市）

九鬼地区青少年育成町民会議（尾鷲市）

ボランティアグループ白夜（熊野市）

※下記「高校生世代活用事業」事例発表団体



平成22年度「青少年育成指導者のための研修会」報告

平成22年12月7日（火）三重県総合文化センターにおいて、県内各地から市町民会議関係者、青少年育成アドバイザー、県・行政関係者約80名の参加者が集い、基調講演と県内の青少年育成市町民会議及び関係団体による当財団の助成金事業「地域活動支援事業」と「高校生世代活用事業」の実践事例発表を行ないました。

基調講演

テーマ 青少年健全育成から子ども・若者支援へ ～子どもの権利条例づくりをめざして～

講師 竹村 浩さん NPO法人チャイルドラインMIEネットワーク 専務理事・事務局長
認定特定非営利活動法人 チャイルドライン支援センター 理事
特定非営利活動法人 三重県子どもNPOサポートセンター 事務局長

講演では、子どもが安全に安心して健やかに育つ社会づくりを目指すために、「今の子どもたちをどうとらえるか？」を視点に「育成から支援へ」意識を変えることの必要性などを話されました。

事後アンケートへは、「子どもは権利主体。権利が保障されていれば人のことも考えられる」、「基本的人権に義務は伴わないということは、あたりまえのことであるのに、そのことを忘れかけていました」、「健全育成とはどういうことなのか、自分なりに考えさせられました」などの感想が寄せられています。



「地域活動支援事業」の実践事例発表

① 川崎子どもフェスティバル実行委員会

（亀山市青少年育成市民会議経由）

事業名 川崎子どもフェスティバル2010

テーマ 「ふれあい」「人」・「物」・「知識」

発表者 実行委員会代表 一見 政幸さん

[写真 右から2人目]

② 名張市青少年育成市民会議

事業名 子どもなんでも体★験★団

テーマ さまざまな体験環境を整える

発表者 市民会議事務局 杉本 一徳さん

[写真 左から2人目]

「高校生世代活用事業」の実践事例発表

③ ボランティアグループ白夜

事業内容 青少年非行防止啓発活動

啓発方法 シーバルク(農業用シート)を使ったPR

発表者 濱口 真世さん [写真 最右] / 黒瀧 一輝さん [写真 最左]



①②の事例発表は、平成22年度中に県内各地13ヶ所で実践された各地域の活動の内2団体の活動紹介です。③の事例発表は、10団体が行なった青少年自身による非行防止啓発活動の内、本年度で4年目になる活動団体の活動を紹介しました。それぞれ特徴のある活動は、他の地域の方々にも今後の参考にしていただけたものと思っています。事後アンケートでは、「他の地域の取組を聞くこと自体に意味がある」、「3団体共、工夫と努力の跡が伺えた」などの感想の他、「継続していくことが大きな課題」であるなどの意見が寄せられました。

毎月第3日曜日は「家庭の日」です。

平成22年度「家庭の日」絵画・ポスター展 各部門 最優秀賞作品

児童の部（小学生）



松阪市青少年育成市民会議 推薦

松阪市立幸小学校 3年生 藤井 麗理 さん
タイトル「みんななかよく」

生徒の部（中学生）



鈴鹿市青少年育成市民会議 推薦
鈴鹿市立鼓ヶ浦中学校 1年生 三谷 綾香 さん
タイトル「初夏の休日」

本年度は、児童の部（167名）、生徒の部（91名）の合計258名の応募がありました。

平成22年度 高校生世代活用事業（青少年自身による非行防止啓発活動実施団体）

※順不同

- ① 尾鷲市青少年育成市民会議 青年部（尾鷲市）
- ② 人財ポケット ひさい（津市・久居）
- ③ 高田中・高等学校馬術部（津市・一身田町）
- ④ 松阪商業高校 あきない屋（松阪市）
- ⑤ 一身田青年団（津市・一身田町）
- ⑥ ボランティアグループ 白夜 [P7掲載]（熊野市）
- ⑦ 北星高校 環境美化部（四日市市）
- ⑧ 宮川高校がんばり隊（大台町）
- ⑨ 河芸町ジュニアリーダーズクラブ（津市・河芸町）
- ⑩ 名張市青少年育成市民会議ジュニアリーダーズクラブ（名張市）

編集後記

赤ちゃんは心のつぼみが開くように笑います。心の力が抜けて笑みがある人には、自然に多くの人達とのコミュニケーションが広がることでしょう。“ことば”は対話となってはじめて完結すると思いますが、笑い声を聞くと周囲の人達も肩の力がぬけるような気がします。大寒の日に、志摩市浜島町の恵比寿神社では海に向かって大笑いをして、大漁や家内安全を願う神事があるそうです。一度参加したいと思います。

『わかすぎ』編集長 中西 智子